巻頭言

その人らしい暮らしを支える

藤井 由記代

当協会理事　ソーシャルワーカー委員会 委員長
（森之宮病院 診療部 医療社会事業課 副部長、社会福祉士）

当院では長年の地域活動に加え4年前から、大阪府市が進めるスマートエイジング・シティの理念をふまえたまちづくり活動に従事している。近隣団地内に福祉用具を利用体験できるモデルルームを開設したり、住民団体・小学校との健康に関するイベントを共同開催するなど、病院・行政・関係機関、地域住民が協力しあえる関係を育んできた。まちづくりのネットワークが個人の支援に活かせた事例もある。

Aさんは、水道が止まり異臭を放つゴミ屋敷で寝たまま生活。「生きていたくない」と、行政や支援者の介入を拒否していた。

近隣住民の苦情により地域ケア会議が開催され、見守り活動を開始した数日後、応答がなくなったため、救急隊が窓を割って介入し入院に至っている。

入院中は看護・介護・リハへの抵抗も強かったが、本人の気分次第で屋内で伝い歩きができるレベルへ改善された。過去に事業に失敗した経験から他人への警戒心が強く、退院時には介護保険や他者の介入を強く拒否される中、ソーシャルワーカーの立場からかかわり、経済的基盤を整えたあと、本人の意向に沿って自宅退院を支援した。

退院前の地域ケア会議では、「自分のペースを乱されるので、訪問サービスや電話を使いたくない」「食事は自宅ドアノブにかけた宅配食を自分のペースで確保する」「孤立死はしたくないので自宅の鍵を当院に預ける」など、Aさんの目指すべき生活像に沿ってプランを検討した。試しに取り付けたベスポジ（天井固定型のI字形手すり）の使い勝手がよかったようで、退院2週間後に介護保険申請に同意された。ゴミ屋敷の清掃、福祉用具のお試し導入、見守り活動、相談支援活動など、退院当初は1日おき、退院から2か月経過した現在、約10日おきに訪問サポートを実施し、Aさんらしい生活を継続されている。

Aさんの生活支援を通し、自己決定に沿った退院支援、退院後フォローアップの意味を再確認できた。「Aさんの意思を尊重する」「孤立死しない・させない」のように、生活支援の目標を地域住民・関係機関と共有し、互いにできることを分担しあい、住民をサポートする活動が地域活動の根幹だと考える。

回リハ病棟は、医学的・社会的・心理的支援が必要な患者さんに対し、心身ともに回復した状態で自宅や社会へ戻っていただくことを目的としており、社会背景への支援を欠かすことはできない。

回リハ病棟が各地域でその人らしい暮らしを支える地域活動に従事し、多職種チームならではの“支援力”を地域に還元していることを願う。